

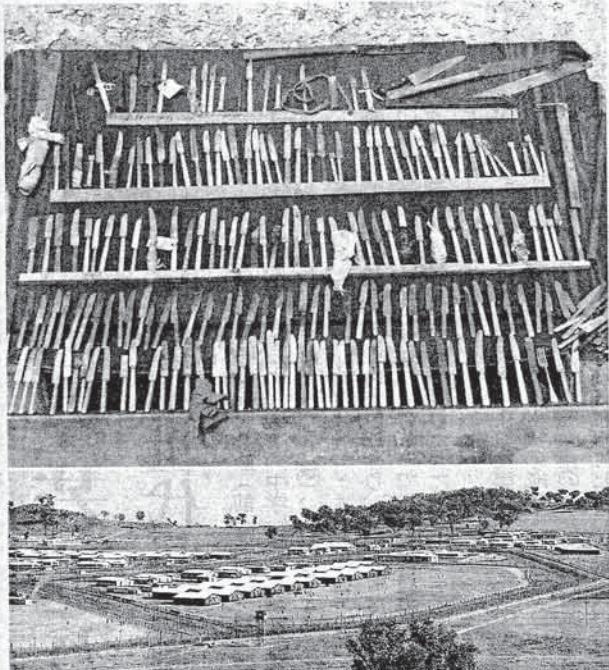
無謀な脱走なぜ

日本人捕虜234人死亡 カウラ事件70年

広島・長崎に原爆が投下される1年前、太平洋戦争の敗色が濃くなるなか、豪州の収容所で日本人捕虜1104人が集団脱走を図った。手製の野球バットや食器ナイフを手に機関銃へ向かって突撃し、日本側234人、豪州側5人が亡くなった。その「カウラ事件」から5日で70年。捕虜たちはなぜ無謀な脱走を企てたのか。記者が生き証人たちのもとを訪ねた。

恥より戦死選んだ

70年前の集団脱走は捕虜が吹き鳴らす突撃ラッパを合図に始まった。1944年8月5日午前2時ごろ、「カウラ第12戦争捕虜収容所」の兵舎からなだれを打って出た日本人捕虜たちを自撃していた人がいた。岡山県瀬戸内市の国立ハ



●集団脱走の際、日本人捕虜が武器に使った食器用のナイフなど＝1944年8月、豪州・ニューサウスウェールズ州、豪州戦争記念館(AWM)所蔵073486 ①カウラ第12戦争捕虜収容所の遠景＝1944年7月1日、AWM所蔵067172、立花誠一郎さん提供



立花誠一郎さん

ンセン病療養所一區久光明園で暮らす、回復者の立花誠一郎さん(93)。ニューギニア北部で捕虜となった同収容所へ送られ、事件の前月、ハンセン病と診断された兵舎から鉄条網を隔てたテントで、寝起きさせられていた。ラッパの音で目覚め、外へ出た。毛布や上着を鉄条網にかぶせて乗り越えようとする集団を、重機関銃の掃射がなぎ倒した。鉄条網



に絡まり息絶えた捕虜。その上を乗り越えようとした捕虜たちも次々と撃たれた。足に弾を受けた男は、上半身を起こして左胸をたたき、「ここを撃てーっ」と絶叫し、再び腰を撃たれて倒れた。兵舎には火が放たれた。照明弾とサーチライトが加わり、収容所は昼間のように明るかった。

当時、捕虜になることは恥だった。立花さんには戦友が「名譽の戦死」を選んだことがすくに分かった。神奈川県で暮らす元捕虜の男性(94)は、鉄条網を乗り越えた直後に左わきと左

蜂起に賛成拒めず

捕虜には十分な食料が供給されていた。収容所生活とはいえ、平穏な日々。捕虜たちは約40の班に分かれ、重要なことは「班長会議」で決めた。会議に緊張が走ったのは事件前日の8月4日だった。豪州側が一部の捕虜の移送を通告し、会議で対応が話し合われた。数人の班長が「これを機に一斉蜂起すべし」と言い始めた。結論は出ず、班ごとに賛否を投票することになった。

肩を撃たれた。意識が戻ったのは病院だった。左肩にも弾丸が残る。捕虜はいずれ銃殺刑になると信じていた。「故郷へ帰りたいが、捕虜になったと知られれば親類まで村八分だと思っていた」。戦後も収容所のことば隠してきた。街で元捕虜の間を見かけても、互いに知らん顔をした。息子にも体験をきちんと話したことはない。「いつまた戦争になり、捕虜や子孫が軽蔑される世の中になるかわからないじゃないか」

「別の土地が見られる」。ニューブリテン島でマラリアにかかり捕虜となった鳥取市の村上輝夫さん(93)は、移送を内心喜んでいった。だが、所属する第5班で投票用紙を渡されると、鉛筆で「○」と記し蜂起に賛成した。「どうせ生きて帰れない。一緒に死のうと言われて拒めなかった」第34班にいた静岡県伊豆市の今井祐之介さん(94)は、東部ニューギニアで飢



地元のカウラ高校へ招かれて体験を語る村上輝夫さん(右)＝4日午前、豪州・ニューサウスウェールズ州

された。信念で「○」と書いた。第13班副班長だった兵庫県宝塚市の金田弘さん(95)は立場上「○」と記した。「せめて逃げられるだけ逃げよう」投票の結果、8割が賛成したと伝わるが、班長の多くは開票結果を班員に知らせなかった。蜂起の数時間後、村上さんは鉄条網の先の溝で、今井さんは近くの丘で、武装した豪州兵に囲まれて投降した。金田さんは6日後に

議論避け 破滅招く
カウラ事件の研究を続ける明治学院大学特命教授で作家の山田真美さんの話 元捕虜たちへの聞き取りでは「誰かが反対するだろう」「自分が賛成しても蜂起には至らないと思った」といった証言を多く耳にした。閉鎖的な集団の中で、議論を避けたり、立場が上の人には逆らわなかったりという極めて日本的な態度が、集団を破滅的な方向へ導く判断を招いた。現代社会にも通じる根深いものが蜂起の背景にはある。事件の教訓をくみ取らなければ、私たち日本人は将来同じ悲劇を繰り返す気がしてならない。